

本展は、この場所（銀座）この空間（ガラスケース）から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応募しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

浅野 明子



「間隙」2022年

略歴

1964年 東京都生まれ。2021年 二人展「パラレルポイント」(武蔵野美術大学、東京)。2022年「令和3年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」(武蔵野美術大学、東京)。2022年「令和3年度第45回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」(国立新美術館、東京)。

作家コメント

人や物、現象、記憶に纏う影、陰、その内側といった人間の目には見えない空間に本質があると捉え、形にすることを目指している。

今回は、異種材を合わせたことで生じる調和や不和、さらに端材を緩く寄木し、本来見えるはずのない陰が実像の不確かさとなって、乖離と融合の狭間が生まれた。分子レベルでは日常的な出来事を材に置き換え、私自身が自己や人との対峙で感じる距離感にも似た何かを探っている。

推薦…桑名 紗衣子

浅野さんは家族の背中やマスクを木彫のモチーフにしてきた。ある時には道端で拾った丸まった枯葉と父親の背中をダブルイメージで重ね、ある時は夕食の為に煮た大根のスジの美しさにインスピレーションを受け彫刻に取り込めないと熟考しながら。彼女が「目に見えるものが全てでは無い」と語るように、日常に潜む些細な感動を拾い上げ粛々と呼応する態度が作品から見えてくる。ここに見える態度は、彼女が社会人として、また母親としての仕事をひと段落させた後に彫刻を始めた経緯と深く関係しているように思う。結果、生まれてくる像が身体の一部である点も興味深い。形態そのものではなく、陰影を追って彫られた形は、何処か揺蕩うように歪む事がある。また、何度も線を引き、決度を重ねて出来た輪郭は、ブレて、揺らいで、しかし実感として強くなる。それゆえに展示の為にアトリエを離れ制作時と全く異なる光線を浴びた時、肉感の厚みと彫りの深さが奇妙な一致を見せ、新鮮な人体像として現れている。浅野さんの彫刻と向き合う時、自分が常に世界に触れている、という身体感覚を再認識し「その度に新鮮な輪郭を見出せるだろうか」と、途方に暮れると同時にワクワクする。

林 和奏



「trap # 01-05」2021年

略歴

1999年 岐阜県生まれ。2019年「ちゅうしんアートギャラリー」(中日信用金庫名古屋支店、愛知)。2019年「記憶の庭で遊ぶ」(旧加藤邸、愛知)。2020年 二人展「〇〇の向こう側」(Art&Design center、愛知)。2020年 CBC テレビ主催「翔け!二十歳の記憶展」(愛知芸術文化センター、愛知)。2021年「第48回名古屋芸術大学 卒業・修了制作展」(愛知)。2021年 二人展「H&M」(シャトー小金井、東京)。2022年 彫刻と対話法 VIII-3「実験の星」(HIGURE 17-15 cas、東京)。**[受賞歴]** 2020年「翔け!二十歳の記憶展 審査員特別賞」。2021年「名古屋芸術大学 卒業・修了制作展 優秀賞」。

作家コメント

自分を忘れていく気持ちになる。
生きていくと沢山の情報が降りかかってきて新鮮なものを古くしてしまう。
ずっと大切にしたいのに、どうして忘れてしまうのかな。
思い出せなかったらどうしよう!
静かに遠くへ行ってしまふから何だかすごく難しい。
近くにきたらお喋りをして、小さく大きくスキップしたい。

推薦…椋本 真理子

林の作品からは、ひとつひとつ愛できるように作られた手跡が感じられる。重ねて削られた木材、切り取られ歪む金網、チェックの布、ビニールに包まれた綿など素材に限定はなく、ところどころ素材と奮闘した跡も残る。それらの作品やドローイングから「思い掛けず構成されてしまったインスタレーション」を見つめていると不思議な感覚に陥る。なんとなく懐かしいような、映画のシーンに入り込んだような、どこか知っているような街、誰かの部屋にいるような感覚。この感覚の根源はどこにあるのだろうか、と以前から気になっていた作家だった。林は、自分の生活から感じたこと、感覚を忘れないようメモをするように作品を作ると言う。ポーズとして見ていた先にある景色、匂い、目線、音、触り心地、幼い頃の体験、記憶に付随した感覚。その感覚を新鮮な状態ですくいあげ作品を作っていくが、自分は自分のことがよく理解できない。林は、理解できない自分を捕まえるため「トラップシリーズ」と題した作品を作り、自分の感覚を畏に自分をおびき寄せ、捕まえられる日を待っている。多くの人が忙しなく行き交う地下通路にひっそりと仕掛けられる罠。林が自身を捕まえるために張った罠は、どれだけの通行人を捕まえるのだろうか。

森下 裕也



「六式陸戦高機動戦術試作実験機」2021年

略歴

1999年 静岡県生まれ。2022年「令和3年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」(武蔵野美術大学、東京)。2022年「令和3年度第45回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」(国立新美術館、東京)。

作家コメント

SF系の特に量産機として活躍するものや、試作されたもの、実験機として製造されたものなどあまり表立って活躍する事がないものが私は好きでありました、製造されたものの背景やそれに至るまでの系譜、活躍する世界観を考え、制作することが自分の作品の特徴であると思っている。今回制作した作品は時代背景とそれによって誕生した量産性、その系譜と発展、応用を重視したものである。

推薦…柵田 康司

森下君の制作は、PCを駆使したパーツ作りから始まる。確かな技術力でストーリーと共に、多数のパーツから組み立てられていく。彼が得意とするプラモデル制作と似た工法だが、実は鎌倉時代から続く寄木造りにも通じるように思う。PC内の無重力状態から3Dプリンタでデータが素材へと生成される時、その瞬間から重力がかり始める。一般的に彫刻は重力に抗う姿勢を持つことが多いが、この場合はその逆で、作者が重力を考え、コントロールしながら意識的に作品へ付け加えていかなければならない。そこが森下作品の重要な要素であり、彫刻へと向かう強みとなるのである。まさに宇宙から地上への移行、壮大な空間物語が小さな作品に込められる。森下君は、これら作品にこだわりを持って「戦術機」と呼び、仮想ストーリーの中で重力と無重力の境界に存在させようとしている。今後、この「戦術機」たちがどのように彫刻化され存在感を増していくのか、また現実社会という荒野に放り出されたとき、どのような一歩を踏み出すのか。マンガやアニメがアートのひとつの流れに確立された今、森下君の歩んでいる細くて険しい道にもポテンシャルは十分にあるのだ。

移動する視点、 通路の彫刻

2022.7.31 [SUN]



10.30 [SUN]

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線
銀座駅コンコース
B7・B8 出入口付近

移動する視点

この空間は、
多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、
通り抜ける場所にある。
「広場の彫刻」ではない、「通路の彫刻」は
可能だろうか。

MAU

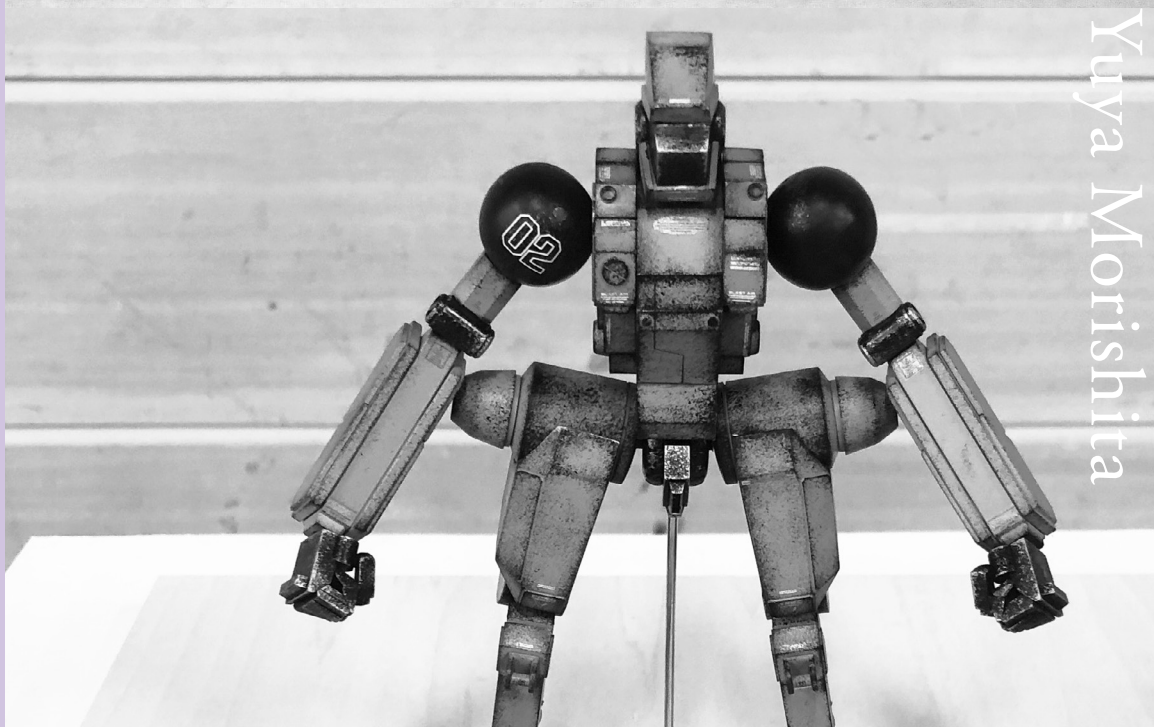
主催：
公益財団法人 マロ文化財団
企画監修：
武蔵野美術大学彫刻学科研究室



Akiko Asano



Wakana Hayashi



Yuya Morishita